

第二言語の文章理解における読解方略の使用

—未知語への対処に着目して—

原 和 久

第二言語で文章の理解を行う際、読み手は様々な困難に直面する。特に、意味の知らない未知語に遭遇する機会は、第一言語と比較した場合、多く見られる。知識が不十分であることの多い学習者である以上、第一言語と同じような形で、第二言語における文章理解を進めることは難しいため、読み手が効率よく文章を理解するためには方略の使用が重要であると考えられている。これまでの文章理解における方略の研究では、文章の理解課題の成績が高い読み手は、方略の使用数が多く、未知語の意味推測も成功しやすいとされてきた。しかし、これらの先行研究では、文章理解における未知語の意味推測に関して、読み手が具体的にどのような方略的特徴を持つのか検討されてきてない。多くの学習者は、未知語の相対したとき、その意味を推測しようとするが、それは必ずしも文章の理解に繋がるとは限らない。さらに言えば、その推測した意味は本当に文章の理解にとって重要であるのか、その判断を読み手はどのように行っているのかを明らかにすることには意義があると考えられる。本研究では、未知語を含む文章の理解を行う際、未知語への対処がうまくできている読み手（もしくはできていない読み手）の方略的特徴を、日本語を第一言語とする英語学習者を対象に検証を試みた。

実験参加者には、未知語の意味推測課題、文章理解、文章要約課題、語彙サイズテスト、未知語の意味推測に関する質問紙、そしてメタ認知的方略に関する質問紙がオンラインで実施された。

実験参加者のうち237名をデータとして分析した結果、文章要約課題の成績が高い読み手は、未知語に遭遇した際、その単語自体の情報だけでなく、未知語を含む文や周辺の文脈情報を活用して意味の推測を行っていた。文章を読み進めていく中で、意味の推測が正確であったかどうかを判断し、修正する方略を使用するなど、先行研究を支持する傾向も見られた。また、未知語の意味推測に限らず、理解した内容が文章において重要である部分とそうでない部分を判断するような方略も使用していた。未知語の意味を推測するといった認知的な方略に加え、文章理解に対する意識や行動を読み手自身が把握し、方略として使用していることから、メタ認知的な方略も文章理解を確認する課題の成績に効果があることが明らかになった。本研究では未知語の対処をうまく行っている読み手は、未知語の意味推測のみならず、文章理解全般の方略を制御できるという特徴があることが示唆された。